

# Q&A形式 Case Study

ここ十年あまりの間に、抗HIV治療は目覚ましい進歩を遂げた。かつて掌に余るほどの錠剤を1日に何回かに分けて内服していたが、それが数錠で済むようになり、そして今や1日1錠の時代になってきている。しかし、その効果を持続的に確実なものとするのは患者自身の継続内服があってはじめて叶えられることである。3ヵ月に1度の来院で済ませられる安定期の患者さんも増えているが、その現実を支えているのは医者ばかりでなく、薬剤師やその他の医療者の連携がある。

本稿では、服薬支援に関わる薬剤師の視点から、長期内服を支援していく現場の日頃の努力をご紹介します。外来受診時の患者の状況を薬剤師に相談した設定である。

## Question

国立研究開発法人  
国立国際医療研究センター  
エイズ治療・研究開発センター  
臨床研究開発部長

菊池 嘉  
YOSHIMI KIKUCHI

### 抗HIV薬を海外出張中に服薬する症例

エルビテグラビル/コビスタット/エムトリシタビン/テノホビルジソプロキシルフマル酸塩 (EVG/cobi/FTC/TDF) が上市された頃にHIV感染が判明し、現在はEVG/cobi/FTC/テノホビルアラフェナミド (TAF) で抗HIV療法 (antiretroviral therapy ; ART) を継続している40歳代の男性が定期受診した。毎晩20時にEVG/cobi/FTC/TAFとロラゼパムを同時に服用している。来月、1週間程度の米国 (ロサンゼルス) 出張を予定しているが、出張先でも20時に服用したい。飲酒の機会は少なく、食事の摂取は可能である。海外渡航時の服薬方法について教えてください。

## Answer

国立研究開発法人  
国立国際医療研究センター  
病院薬剤部HIV感染症専門薬剤師

佐藤 麻希  
MAKI SATO

### はじめに

法務省入国管理局によると、2015年度の日本人海外渡航者数は約1,621万人<sup>1)</sup>と報告されている。交通手段

の発達や国際化が進み国内における海外渡航者数は年々増加傾向にあり、海外旅行や留学などで医薬品を海外に持ち出すケースが増えている。しかしながら、飛行機による長時間の移動や食事の変化、複雑な時差、疲労など日常とは異なるさまざまな影響により服薬アドヒアランスの維持に支障をきたす可能性がある。また、海外への持ち込み医薬品については渡航先国の事情により法規制が異なるため、日本人渡航者のトラブルも発生している。日本を出発する前に外務省のホームページ (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/link/embassy/>)